

（創作音楽劇）

AMDEO ～モディリアーニの生涯～

Script of Amedeo - Life and Death of Modigliani -

狩谷 新

プロローグ ♪G線上のアリア（バッハ）

タイトル「ムージャン パブロ・ピカソ（91）の静養先 Mou
gins 南フランス 1973年4月1日」

テラスで日を浴びているピカソ。その後ろで花を生けているフランソワーズ・ジロー。

ピカソ「君が見舞ってくれるとは思わなかったよ、フランソワーズ」

フランソワーズ「91年間も生きて、1万3500点の絵画、

10万点の版画、3万4千点の挿絵、300点の彫刻と陶器を製作なさった最も多作な美術家、パブロ・ピカソの最期を見届けたかったの」

ピカソ「相変わらずきれいだ」

フランソワーズ「吊り落とした魚は大きく見えるものよ」

ピカソ「一度は吊り上げた」

フランソワーズ「そうね。43年に会って、46年から7年も一緒に暮らした」

ピカソ「18年も前のことだ」

フランソワーズ「お陰で私は、「あなたを捨てた唯一の女」という称号を戴いた」

ピカソ「フランソワーズ・ジロー、確かに君は、このパブロ・ピカ

ソを捨てた唯一の女性だ。しかし、唯一の人間ではない」
フランソワーズ「是非ご紹介したいわ。その方とは良いお友達になれそう」

ピカソ「そうかもしれん。しかし、それは無理だな」

フランソワーズ「あら、今の私なら、世界中、どこへでも自由にけるのよ」

ピカソ「残念なことにその男は、君が生まれる一年も前にこの世を去った」

フランソワーズ「もしかすると私は、彼の生まれ変わり？」

ピカソ「そう考えると、君に会って奴を思い出すのも納得できる」
フランソワーズ「誰なの？その素敵な殿方は？」

ピカソ「アメデオ・モディリアーニ。最期まで、このピカソに屈服しなかった唯一の男だ」

メインタイトル AMEDEO ～モディリアーニの生涯～

ピカソ「わしが、スペインのマラガで生まれた3年後、奴は、イタリアのリヴォルノで、スペイン系ユダヤ人の裕福な家庭に末っ子として生まれた」

フランソワーズ「あなたと同じスペインの血が流れていたのね」

ピカソ「そうだ、だが、奴は、わしが常にスペイン人であったように、イタリア人だった」

○ リヴォルノ モディリアーニ生家 1884年7月12日
中央に置かれたベッドにありとあらゆる家財が積み上げられ、その上に寝ているエウジェニア。

フランソワーズ「何、あのベッド？」

ピカソ「奴の父親が破産したんだ。母親のエウジェニアは、「出産中の女性のベッドはなんびとも侵すべからず」という古代ローマの法律を楯に、財産を守っているんだ」

フランソワーズ「尊敬すべき女性だわ」

ピカソ「彼女は、アメデオを生んだ後、落ちぶれた夫に代わって、家庭教師から初めて、学校まで作ってしまう」

フランソワーズ「親が教師だったのもあなたと同じね」

ピカソ「違うな、わしの親父は、わしが生まれる前から美術の教師だったが、エウジェニアが教え始めたのは、アメデオが生まれた後だ。それに彼女は、どちらかといえば、経営者だった」

エウジェニア「誰か！先生を！私の天使が、生まれるの！」

暗転。

赤子の産声が響く。

○ グリエルモ・ミケーリ アトリエ 1900年 アメデオ16歳

カンバスに向かっていているアメデオ。

そこへやってくるオスカル・ギーリア（24歳）。

オスカル「アメデオ、君はまた人物デッサンか？ミケーリ先生は、風景が専門だぞ」

アメデオ「僕は、人が、自分だけで作り出した最も美しいものを描いているんだ」

オスカル「確かに、山や小川は、人が作ったものじゃないがな」

アメデオ「オスカル、君がヴィエンナーレに出そうとしているのも、自画像じゃないか」

オスカル「君がいつも言っているとおり、風景画で個性を出すのは難しいんだ」

○ 乙女が、レスピーギ「漂ってくるバラの香りが（詞…ダヌンツイオ）」を歌う。

庭より漂ってくるバラの香り 弦が響かせる 愛の調べ
どれもが 遠く 深い夜に消え去っていく 魅惑に満ち溢れて
若さの激しいワインが輝き 燃え上がる 血潮の中に オーラ
を運んでいく

乙女の吐息のような 官能的な香りを
波が人気のない岸に打ち寄せるように 庭より漂ってくるバラ
の香り

愛の調べが響いてくる あなたの流星のように

Van li effluy de le rose da i verzieri

de le corde van le note de l'amore` lungi van per l'alta note

piena d'incantesimi.

L'aspro vin di giovinezza brilla ed arde ne le arterie umane:

reca l'aura a tratti

un tepor voluttuoso d'aliti feminei

Spian l'aque a i solitari lidi; vano` van li effluy de le rose
da i verzieri`

van le note de l'amore` lungi e le meteore.』

オスカル「ダヌンツイオだな」

アメデオ「人間だけが、美しさを尊び、言葉を操り、絵筆を駆使し、
岩を削って、何も無いところから「美」を生み出すんだ」

オスカル「お得意の芸術至上主義だな」

アメデオ「ニーチェを読んだろ？神は死んでも美は残るんだ」

オスカル「ミケリー先生の言うとおり、君はまさしく「超人」だな」

アメデオ「ミケリー？彼は僕にとって最早、シュューベルトのホルツアーさ」

オスカル「教えられることはもう…」

アメデオ「何も…（激しく咳き込む）」

オスカル「どうした？」

アメデオ「神を呪った報いか？（咳き込む）」

オスカル「アメデオ！」

フランソワーズ「カラダが弱いのか？」

ピカソ「14の時に腸チフスに罹ってる」

フランソワーズ「よく助かったわね。当時は不治の病でしょ？」

ピカソ「母親の献身的な看病でどうにか回復したんだ」

フランソワーズ「でも、また…」

ピカソ「肋膜炎だ。正直者で礼儀正しいお坊ちゃんは、度々いかがわしいところでタバコを吸ってたようだからな。医者是最悪の

事態を覚悟しろと告げたそうだ」

フランソワーズ「でも回復したのよね」

ピカソ「今度も母親のお陰だ。転地療法さ」

○ ナポリ国立考古学博物館

ギリシア・ローマの彫刻を見て歩くアメデオ。

フランソワーズ「学校をやめて、美術館で学んだのはあなたと同じね」

ピカソ「わがスペインが誇るプラド美術館でな」

フランソワーズ「ベラスケスの模写をしてたんだったわね」

ピカソ「そうだ。しかし、奴が見たのは、それ以上だ。ナポリ中の教会を訪れ、ティエーノ・ディ・カマイーノの彫刻に触れ、海沿いの町で、アトリエを持ち、カプリ島で、静養してんだ」

フランソワーズ「優雅なこと」

ピカソ「奴は、そこから、ローマへ行った」

○ ローマ 1901年 アメデオ 17歳

ローマの偉大な芸術を背景に、手紙で友に呼びかけるアメデオ。

アメデオ「オスカル、ローマは、君に話す時は外側ではなくまさしく内側、僕の中にあるんだ！7つの傲慢な観念のように7つの

丘に散りばめられた宝石のごときものだ。ローマは僕を取り巻くオーケストレーションで、僕が外部とのつながりを絶って自

分の想念に集中できる場所だ。ローマの熱っぽい甘美さ、悲慘な郊外、特有の美と調和、そうしたものはすべて僕の思想と作

品と引き換えに僕のものになる」

フランソワーズ「既にしてローマと一体化した大芸術家ね」

ピカソ「傲慢そのものだ」

フランソワーズ「その点は、誰かさんと似てみたいだけど？」

ピカソ「わしがそうだったのは、もつと後だ。奴はまだ17だぞ」

フランソワーズ「そして、まだ、誰にも認められてはいない。

1901年ってことはあなたがパリで最初の個展を開いた年よね」

ピカソ「そうだ。二十歳の時だ」

フランソワーズ「『青の時代』の始まりって言われてたわね。でも

こうしてみると、あなたとアメデオの経歴、随分似てるわ」

ピカソ「違うね」

フランソワーズ「二人とも10代のはじめで、基礎を習って、学校よりも、先人の作品に多くを学んでるじゃない」

ピカソ「わしは、親父に習ったが、奴を育てたのは、母親の金だ」

フランソワーズ「安上がりでよかったじゃない」

ピカソ「金があるってことは、余裕があるってことだ。アメデオは、絵を学んだだけじゃない。ニーチェ、ダンテ、ボルテールに囲まれて生活してたんだ」

フランソワーズ「教養があったってことね」

ピカソ「わしが体で覚えたことを、奴は頭で修得していたんだ。わしが、自分で稼いでパリで暮らしていた時、奴はフィレンツェで遊び回ってた」

○ フィレンツェ 1902年 アメデオ 18歳

♪花のワルツ

○ スクオーラ・ディ・ヌード

屋根裏部屋で、デッサンに励んでいるオスカルとレヴェリン。

そこへ、美女を連れたいアメデオ登場。

美女「この薄汚れた屋根裏部屋が芸術の殿堂？」

アメデオ「失礼なことを言うな。ここは、マッキア派の代表と呼ばれ、わがフィレンツェ・アカデミーのデッサン専任教授にして、トリノ・アルベルティーナ美術アカデミーの一員、ジョヴァンニ・ファットーリ先生が、直々に指導してくださる場所だぞ」

オスカル「アメデオ、そう思ってるなら、お前も少しは真面目に

通ったらどうだ」

アメデオ「オスカル！悲しいことを言わないでくれ。僕は、毎日、身を削って、学んでるんだ」

レヴェリン「常に美女を侍らせてるか？」

アメデオ「レヴェリン！断っておくが、僕が女性を口説くんじやない。彼女たちが僕を慕ってくるんだ」

オスカル「それは、うらやましい限りだ。モデルにもことかかないってことだな」

アメデオ「僕が、アトリエにモデルを連れてきちゃいけないのか？」

オスカル「いいかアメデオ、僕もこのレヴェリンも、パンを買う金も惜しんで、ここに通ってる。朝早く起きて、夜は疲れて泥のように眠ってる。お前は、一晩中起きて、遊びまわり、俺の寝床の横でモデルにポーズを取らせ、朝は高いびきだ」

アメデオ「怒ってるのか？」

オスカル「怒ってはいない。今はもうあきれてるだけだ」

アメデオ「これは驚いた。あきれてるのは僕の方だぞ」

オスカル「仕送りで優雅に生活しているお坊ちゃんは何に呆れていらっしやるのかな？」

アメデオ「オスカル、レヴェリン、わが同郷の友よ。ここは、リヴォルノじゃない。かのメデイチ家が支配し、偉大なるロレンツォの下、ダヴィンチ、ミケランジェロ、そしてラファエロが活躍したルネッサンスの聖地だ」

レヴェリン「それを僕らが知らないと言っても言うのか？」

アメデオ「知ってはいるだろうが、それだけじゃ意味がない」

オスカル「僕らが時間を無駄にしてるって言うのか」

アメデオ「その通りだ！サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂

堂！ヴァッザリーの回廊、ビッティ宮殿、この町のすべてが人の手で作られた芸術で満ち溢れてる。僕は、この街と戦ってるんだ」

レヴォリン「城壁でも壊すつもりか？」

アメデオ「壊されるのは僕の方だ」

オスカル「？」

アメデオ「この街の圧倒的な美しさが、僕のちっぽけな美意識を押しつぶそうとしてる」

レヴォリン「僕らはそれに打ち勝つ技術をここで学んでいるんだ」

アメデオ「確かにファットーリ先生は優秀だ。でも、彼もこの街から逃れられない」

オスカル「どういう意味だ」

アメデオ「僕は、この春、ヴェネツィアで遠くチリからやってきた芸術家に会った。オルティスというこの若者は、サンチャゴの両親の反対を押し切って、パリに渡った。彼は、過去を断ち切ったんだ」

オスカル「僕らは、過去に囚われてるっていうのか？」

アメデオ「この街は、完成された美しさを持ってる。確かに学ぶことは多い。君たちがこの部屋で学んでいる以上のことを僕は、街へ出て学んでるんだ」

オスカル「僕らも街へ出ろってことか？」

アメデオ「それだけじゃ駄目だ。オルティスの話を聞いて、僕は目指すべき場所を見つけた」

オスカル「どこだって言うんだ」

アメデオ「パリだ！」

○ パリ

フランソワーズ「この時点で坊やはパリの先進性に気づいていたのね」

ピカソ「すぐにでも行きたかったんだろうな」

フランソワーズ「行けなかったの？」

ピカソ「アトリエを共有していたギーリアが結婚すると、1903年、アメデオは、ヴェネチアの美術学校に移る」

○ ヴェネチア娼館 1904年 アメデオ 20歳

娼婦をベッドに寝かせ。熱心にデッサンをしているアメデオ。

娼婦「あんたも変わってるね」

アメデオ「そうかな。普通だと思うけどな」

娼婦「あんた程の器量なら、こんなところで金を払わなくても、絵のモデルになる女ならいくらでもいるだろうに」

アメデオ「確かに、そういう女性はある。でも彼女たちは、嘘つきだ。君とは違う」

娼婦「嘘なら私らだっつくわ。いつだって好きでもない男と愛を語ってる」

アメデオ「それは職業上の嘘だ。淑女と呼ばれるお嬢さん方は、自分の美しさを隠すことで大嘘をついてる」

娼婦「それを喜ぶ男もいるでしょ」

アメデオ「僕は違う。僕には、使命がある」

娼婦「大層なものいだこと」

アメデオ、突然、カンバスを破る。

娼婦「どうしたの？」

アメデオ「君の美しさを線で描くなんて、できない」

娼婦「？」

アメデオ「豊かな立体としての美しさを、平らなキャンパスにどう写せばいいんだ」

娼婦「それが、絵を描くってことじゃないの？」

アメデオ「だから駄目なんだ。君の美しさを残せるのは、同じような立体だ」

娼婦「(破られた絵を見て) 十分きれいに描けてるじゃない」

アメデオ「(娼婦の顎を掴んで) この美しい顎を再現するラインがどこにあるって言うんだ。(顎をなぞりながら) このなめらかに続く美しさをたった一本の線で表すなんて……」

娼婦「それを見つけるのが、あなたの使命なんじゃないの？」

アメデオ「ロダンならできた」

娼婦「彫刻家の？」

アメデオ「そうだ。量感のある美を彼は見事に再現した。ヴィエンナーレで君も見ただろ」

娼婦「ヴィエンナーレ！あんなの言う美しさを覆い隠した大嘘つきの淑女の皆さんが大挙して押しかけるようなところへ、この私が行ったと思う？」

アメデオ「あそこで重要なのは、展示されてる作品だ。観客じゃない」

娼婦「そうだとすると、全員に蔑まされるのは御免だわ」

アメデオ「モネ、シスレー、ルノワール、ヴィエンナーレの天才たち、今皆パリにいる」

娼婦「あなたも行きたいのね」

アメデオ「今すぐに！ここには過去しかない。未来はないんだ……」

娼婦のひざに突っ伏すアメデオ。

○ ヴェネチア

フランソワーズ「随分純粋な坊やね。ボヘミアンの象徴とは思えないわ」

ピカソ「定まった住いを持たず、異なった伝統や習慣を持ち、周囲から蔑まれても、いっこうに気にしない、確かにアメデオはボヘミアンを気取ってた」

フランソワーズ「なんのために？」

ピカソ「自分が本当は、育ちのいいマザコンだってことを隠そうとしたんだろうな」

フランソワーズ「そのために夜な夜な娼婦を買って、薬や怪しげな交霊会に参加してたって言うの？」

ピカソ「自己演出だな。その証拠に、奴は、性病に罹ったこともなく、自殺もしなかったし、アル中にもならなかった。仮面の下は、純粹で無垢な礼儀正しい坊やだったのさ」

フランソワーズ「だから、女が惹かれたんだわ」

ピカソ「本質を見抜いてたってことか？」

フランソワーズ「賢い女は、どんなに隠しても純粹さを見分けるの」

ピカソ「それがわしを捨てた理由か？」

フランソワーズ「私たちのことは置いといて、何故、アメデオはパリに行けなかったの？」

ピカソ「もう一人のアメデオ、母親の弟なんだが、姉の子どもたちを経済的に支えていたこの男が死んでしまったんだ」

フランソワーズ「母親の弟なら、まだ若いんじゃない」

ピカソ「一生独身だったこの男には自殺っていう説もある」

フランソワーズ「それじゃ、彼、パリには……」

○ ヴェネチア サン・バルナバス アメデオの下宿 1905年
12月 アメデオ21歳

対峙しているエウジェニアとアメデオ。

アメデオ「母さんなら、きっと僕の願いを叶えてくれると信じてた」

エウジェニア「このお金で、きっと夢を叶えなさい。でも、覚悟して、これが、もしかすると、私があなたにしてやれる最後のことかもしれないの」

アメデオ「大丈夫だよ。パリでなら、僕は羽ばたける。きっと一人前になる。(赤い本を見つけて) これは？」

エウジェニア「ワイルドの詩集よ。『レディング牢獄のバラード』」

アメデオ「男はみな、愛する者を殺すのだ、みなの方よ よく聞くがいい。」

ある者は厳しい顔つきで、ある者はへつらいの言葉で、卑怯者は口づけによって、勇者は剣をもって」

エウジェニア「くれぐれも無茶はしないでね」

アメデオ「安心して。パリにいる連中に比べれば僕は修道女のようにおとなしい」

フランソワーズ「結局、母親のお金でパリまでやってきたのね」

アメデオ「マドレーヌ広場の立派なホテルに泊まって、仕立てのいいスーツに身を包み、幅広い帽子を被って、パリ中の画商を巡った」

フランソワーズ「上客にしか見えないから、画商たちは丁寧に対応したでしょうね」

ピカソ「モネ、ピサロ、ゴーギャン、ゴッホ、マチス、そして、わしの絵も丹念に見て回った」
フランソワーズ「あなた自身、逢ってるんでしょ？」

○ とあるカフェ パリ 1906年4月 アメデオ21歳

坐っているピカソのところにやってくるアメデオ。

アメデオ「ピカソさんですね」

ピカソ「そうだが、君は？」

アメデオ「モディリアーニと言います。イタリアから来ました。あなたが描きになったパステルと水彩画を見てから、ずっと貴方にお会いしたいと思っていました」

ピカソ「それは光栄だが……」

アメデオ「是非一杯おごらせて下さい。なんでもお好きなものを」

ピカソ「では、ベガ・シシリアをもらおうかな」

アメデオ「(傍にいたギャルソンに小声で注文する) 掛けてもよろしいですか？」

ピカソ「ご遠慮なく」

アメデオ「絵を観たはサゴの店です。パステルのほうには「パブロ・ルイス」、水彩の方には「ピカソ」とサインがありました
が、二枚が同じ人の作品だとすぐにわかりました」

ピカソ「私の本名をご存知か？」

アメデオ「パブロ・ルイス・ピカソ？」

ピカソ「パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネボムセーノ・マリーア・デ・ロス・レメディオス・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・ピカソ」

アメデオ「新約聖書ですか？」

ピカソ「スペインじゃ普通なんだ。ルイスも平凡な名前だね。本来ピカソは母方の姓なんだが、覚えてもらうには、変わってる方がいいだろ」

アメデオ「確かに響きがいい」

ピカソ「君も絵を？」

アメデオ「まだまだ修行中です」

ピカソ「お泊りは？」

アメデオ「マドレーヌ広場のホテルに」

ピカソ「君は、画家になって花でも描くつもりかい？」

アメデオ「花も描くかもしれませんが……」

ピカソ「ドガは、オペラ座の楽屋からモデルを何人も調達してたっていうのに、オペラ座の傍には決して住まなかった」

アメデオ「ではどこに住めばいいんでしょう？」

ピカソ「モンマルトルだ」

フランソワーズ「あれが、24歳のあなた？ちょっと若すぎない？」

ピカソ「アメデオとは3つしか違わないんだ」

フランソワーズ「結構なイケメンだったってこと？」

ピカソ「写真くらい見たことがあるだろ？」

フランソワーズ「私が逢った時、あなたとつくに60を過ぎてたのよ。そんな人の二十代の写真を見てもしようがないでしょ」

ピカソ「お前はともかく、この頃、奴は、わしを評価しておった。近代主義者で傑出した三人の中にマチスとわしを上げていたようだ」

フランソワーズ「残りの一人は？」

ピカソ「多分、奴自身だ」

フランソワーズ「まだ何も認められていないのに？」

ピカソ「仕事はしていたようだ。わしの助言通り、ホテルを引き払って、モンマルトルに住んだ。仕送りはあったようだが、十分とはいえなかったんだろうな。始終、引越してばかりいたな。確か洗濯船にもいたはずだ」

○ モンマルトル 洗濯船 ピカソのアトリエ 1906年 秋
アメデオ22歳

描きかけのキャンバスが並び、絵の具や筆が食べ残した食物と一緒に放置されたアトリエで、ピカソ、その愛人エヴァ、マックス・ジャコブ、アポリネール、ドラン、ブラックが、ワインを酌み交わしている。

マックス「彼女の白い腕、それが私の地平線のすべてだった」

アポリネール「見事だ！マックス、君こそ天才だ。その短い言葉の

中に君は、世界を凝縮した」

エヴァ「でも短すぎるわ。私はアポリネール、貴方のミラボー橋が好き。」

ミラボー橋の下をセーヌは流れ、われらの恋も流れる

わたしは思い出す 悩みのもとには楽しみが来ると

日も暮れよ、鐘も鳴れ 月日は流れ、わたしは残る

手に手をつなぎ顔と顔を向け合はう かうしていると

われ等の腕の橋の下を 疲れたまなざしの無窮の時が流れる

日も暮れよ、鐘も鳴れ 月日は流れ、わたしは残る

流れる水のように恋もまた死んでいく 恋もまた死んでゆく

生命ばかりが長く 希望ばかりが大きい

日も暮れよ、鐘も鳴れ 月日は流れ、わたしは残る

日が去り、月がゆき 過ぎた時も 昔の恋も

二度とまた帰って来ない

ミラボー橋の下をセーヌが流れる

日も暮れよ、鐘も鳴れ 月日は流れ、わたしは残る」

そこへ、アメデオが美女とともに乱入する。

アメデオ「そこへバルコニーの縁から落とされた

片方の手袋が美しき手より

トラとライオンの間 ちょうど真ん中に

騎士ドロールジュに向かつてからかうように指をさし

令嬢クニグンデが振り返った

「騎士さん あなたの愛がとても熱いのなら

ちょうどあたしにいつもお誓いになっている通りなら

ねえ あたしにあの手袋を取ってきてくださいませんか

(シラー「手袋」)

ドララン「これはこれは、わが高貴なる紳士、アメデオ様のご登場

だ」

ブラック「今更シラーでもあるまい。反革命の闘士気取りが！」

アメデオ「さすがは急進派のブラック様だ。しかし、あらゆる革新

の本質は、過去を認めることから始まるってことを忘れないで

いただきたい」

ドララン「アメデオもといモディ、博識の貴方様のことだ、このモ

ディがフランス語で何を意味するか、当然ご存知だな？」

アメデオ「呪われし者、その名はアメデオ

『そこで騎士は急いで 恐ろしき闘技場へと降り

確固とした足取りで

猛獣たちの間から 彼は手袋を拾い上げた 大胆な指で

驚きと恐怖で 騎士たちや貴婦人たちは眺めていた

そして彼が手袋を取って戻ってくると

どの口からも彼への讃嘆がこだました

だがやさしい愛のまなざしで

それは彼に将来の幸運を約束しているものだったが

彼を令嬢クニグンデが迎え入れたとき

彼は手袋を彼女の顔へと投げつけ

「お礼など、お嬢様 私は必要ございません」

そして即座に彼女から去って行つた『我もまた、

騎士に習つてこの場を去ろう。

だが諸君！決して忘れたもうな！

我こそがなんじら革新の徒を一人称える者で

あることを！」

アメデオ、美女と共に去る。

ドララン「飲んだくれが！」

ピカソ「あの男は酔つてなどいない。酔つたふりをして、自分を

呪つてるんだ」

マックス「同じユダヤの血を引くものとして、同情を禁じえんな」

アポリネール「アメデオが呪っているのは血筋じゃあるまい」

ピカソ「アメデオの泊まっていたホテルの天井が崩れた話を聞いた

か？」

ドララン「オーナーが、あわてて未払いの金を取り戻しに行つたつて

話か？」

ピカソ「部屋に入ってきたそのオーナーに向かつて、アメデオは叫

んだそうだ

『目が見えなくなつて、頭も割れてしまった。僕は偉大な芸術家だから、数十万フランの損害賠償をよこせ!』
ブラック「まさに呪われし者だな」

♪ 煙突掃除

煙突掃除だよ! おいらは醜くて黒く見えるけど

おいらのそばを通る人を汚しちまうけど 服はぼろぼろだし
いつもはだして歩いてるけど

ああ! おいらより幸せ者っているんだらうか

この世界に他にいるとは思えない

煙突掃除だよ! だんな様方 奥様方

煙突掃除だよ ほんのちよつとの施しで

あんた方を火事から守るんだよ

ああ! だんな様方 奥様方 煙突掃除だよ

おいらは日の出る前に起きて

この町中を おいらの呼び声で通りを満たすのさ

おいらに意地悪するやつなんていない

ああ! おいらより幸せ者っているんだらうか

この世界に他にいるとは思えない

煙突掃除だよ! だんな様方 奥様方 煙突掃除だよ

ほんのちよつとの施しであんた方を火事から守るんだよ

ああ! だんな様方 奥様方

煙突掃除だよ ときどきおいらは屋根に登って

ときどきおいらは部屋に入り込む

おいらの名前で子供たちは びっくりして静かになるのさ

ああ! おいらより幸せ者っているんだらうか

この世界に他にいるとは思えない

煙突掃除だよ! だんな様方 奥様方 煙突掃除だよ

ほんのちよつとの施しで

あんた方を火事から守るんだよ

ああ! だんな様方 奥様方 煙突掃除だよ

ピカソ「アメデオの審美眼は本物だ。その目に答えられない自分を呪っているんだ」

フランソワーズ「どうみても貴方たちの方が、ボヘミアンね」

ピカソ「わしらは皆若く、日々過去の亡霊と戦つてた。たまに羽目を外してたのはいわば戦士の休息だ」

フランソワーズ「アメデオはまともに見えたわ」

ピカソ「奴は、アル中で、監獄のような病院と酒場を往復していた

ユトリロの才能を誰よりも先に発見した」

フランソワーズ「確かな『審美眼の表れ』ってことね」

ピカソ「ユトリロと酒を酌み交わすことで、自分も戦っていると錯

覚したかったんだらう」

フランソワーズ「目的地は見えているのに、道がわからない」

ピカソ「そこがわしらと違うところだ。わしらは目的地など気にせず、道を辿っていたんだ」

フランソワーズ「彼は道を見つけるの?」

ピカソ「翌年、奴の作品が展示会に入選した」

○ サロン・ドートンヌ グランパレ パリ 1907年10月
アメデオ 23歳

自分の絵（帽子の女）の前に佇んでいるアメデオ。

近づいてくるポール・アレクサンドル（26歳）

ポール「これは、貴方の作品ですか？」

アメデオ「そうですが、貴方は？」

ポール「これは失礼、ポール・アレクサンドル外科医の修行を終えたばかりの俄か医者です」

アメデオ「確かに私の体は丈夫とはいえませんが…」

ポール「いいえ、医者とは生活の糧で、私は、あなたのような芸術家を支援したいと思っています」

アメデオ「私を芸術家だと認めて下さるんですか？」

ポール「貴方の作品は、どれも今回のサロンで最大の成果です」

アメデオ「大変喜ばしいお言葉ですが、客観的にみると、貴方は少数派ですよ」

ポール「あのセザンヌだって、最初は評価されなかった」

アメデオ「セザンヌがお好きですか？」

ポール「僭越ながら、あなたも影響を受けておられる」

アメデオ「これはどちらかといえば、ロートレックを意識してるんですが、確かに、僕もセザンヌは好きです」

ポール「ピカソの『アビニオンの娘たち』は、ご覧になりましたか？」

アメデオ「衝撃的でした」

ポール「『自然を円筒、球、円錐によって扱いなさい』というセザンヌの言葉を具現化した作品という人もいます」

アメデオ「確かにピカソは2次元の絵画を立体化しました。あれは、立体である肉体をラインで現すという絵画の究極の課題の一つの答えかもしれない。でも…」

ポール「でも？」

アメデオ「あのやり方は、僕には直接過ぎるように思えるんです」

ポール「私もそう思っていました。そして、私は貴方の作品に出会って確信したんです」

アメデオ「私の？」

ポール「あなたは、ピカソとは異なるアプローチで、同じ目的を果たそうとしている」

アメデオ「僕が？」

ポール「初対面で大変失礼ですが、貴方を応援させていただきませんか？と云って、私の財力では大層なことではありませんが…」

アメデオ「！」

フランソワーズ「ようやく理解者が現れたようね」

ピカソ「ポールは弟のジャンと一緒にモンマルトルのデルタ通りの空き家を買って、若く無名な芸術家に提供したんだ」

フランソワーズ「アメデオもそこへ？」

ピカソ「勿論だ。引越しの手伝いに来たポールは、荷物の中からこの絵を見つけたんだ」

スクリーンに「ユダヤの女」

ピカソ「セザンヌの影響が色濃く出てる。この絵をポールは即金で買い取って、他の絵も決して捨てるなど言ったそうだ」

フランソワーズ「セザンヌだけじゃないわ。この絵はあなたの影響も受けてる」

ピカソ「青っぽいからな」

フランソワーズ「彼の審美眼が正しかったといったのはあなたでしょ。彼は、貴方の才能を認めてたのよ」

ピカソ「この頃のわしの作品が高く評価されるのは、ずっと後だ。わしもこの頃、ようやくスタイルを掴みかけてた」

フランソワーズ「彼はまだもがいてる」

ピカソ「ポールはもしかするとアメデオ自身よりも奴の才能に気づいていたんだろう。戦争が始まるまで、二人はいつも一緒にいた」

フランソワーズ「こっち系？」

ピカソ「違う違う！モディは相変わらず浮名を流してたし、ポールも結婚してた。よき理解者で、同じ希望を共有してただけだ」

フランソワーズ「楽しそうね」

ピカソ「こんなこともあったそうさ」

○ 芸術家コロニー デルタ通り パリ 1908年12月31日

アメデオ 24歳

アメデオ、ポール、アンリ、モリス、それに数人の美女が集まっている。

アンリ「さて諸君！ドラン、ブラック、ピカソが暴れまわった1908年も、今夜で終わる。来年こそ、偉大なるポールが支える我らの年とすべく、乾杯というじゃないか！」

アメデオ「乾杯？そんな生ぬるいことじゃ、悪霊は払えないぞ！火をつけるんだ。」

『炎、それは擦り切れた旗となつてもマストに聳える』

美女1「誰か止めなさいよ。裸で踊るより、始末が悪いわ」

アンリ「心配するな！ワインは醸造酒だ、燃えはしない」

モリス「燃やせ！キュビズムもダダイズムも燃やしてしまえ」

美女2「燃え上がらせて！」

アメデオ「恐れるな！聖なる炎が焼き尽くすのは悪の華のみ！」

アメデオ、紙束に火をつけるとパンチの入ったボールに近づける。燃え上がる炎。啞然とする一同。一人笑い転げるアメデオ。

フランソワーズ「随分派手な大晦日ね」

ピカソ「けが人もなかったし、何かが燃えたという話もなかった。大体、本当に火をつけたかどうかもわからん」

フランソワーズ「都市伝説？」

ピカソ「アメデオならやりかねない。皆がそう思ってた。いや、奴は自分でそういうイメージを作り出してたんだ」

フランソワーズ「何のために？」

ピカソ「スタイルを見つけれないことを隠そうとしてたんだらう」

フランソワーズ「どうしてわかるの？」

ピカソ「奴は、ポールに頼んで、フランシークに半ば弟子入りする」

フランソワーズ「彫刻家の？」

ピカソ「そうだ。モディは、奴に魅せられて、引っ越しちまったくらいだ」

フランソワーズ「どこへ？」

ピカソ「モンパルナスだ」

○ ブランクーシのアトリエ モンパルナス

マスクもつけずに岩（接吻）を彫り続けているコンスタンティン・ブランクーシ（33）

マスクをかけ、熱心にその手元を見つめているアメデオ。

ブランクーシ「そう熱心に見つめられると、手が震えそうだ」

アメデオ「すみません。ただ見惚れてしまつて」

ブランクーシ「少し喉をうるおそうかと思うんだが、どうだ？」

アメデオ「喜んで」

二人、テーブルへ行き、ワインを注いで、乾杯する。

アメデオ「ロダンのところにいらしたんですね。助手に誘われたと聞いてます」

ブランクーシ「そんなこともあったな」

アメデオ「どうして断られたんです？」

ブランクーシ「ロダンは、文字通り大木だ。大きな影を落としてる。

その影の中では、何も育たない」

アメデオ「祈る人を観ました。あの柔らかな曲線のフォルムは本当に見事でした」

ブランクーシ「アフリカの彫刻を見たか？」

アメデオ「勿論！あのシンプルさこそ、真の芸術です」

ブランクーシ「ピカソはそれを2次元に移し変えた。まだ完成はしていないが、あの技量は俺にはない」

アメデオ「でも彫刻なら！」

ブランクーシ「そう思った。君の周りにはいつも美女がいるな」

アメデオ「？」

ブランクーシ「攻めてるわけじゃない。彼女たちの美しさをそのまま再現するにはどうしたらいい？」

アメデオ「立体をそのまま、立体に置き換える」

ブランクーシ「それなら、デスマスクのように型をとって、石膏を流し込めばいい」

アメデオ「でも、それじゃあ…」

ブランクーシ「単なるコピーだ。毛穴の一つ一つまで、再現したとしても、それは技術の結晶ではない」

アメデオ「省略ですね」

ブランクーシ「彼女たちの美しさに毛穴は必要ない。そうやって不要部分を極限までそぎ落とす」

アメデオ「何を残して、どこを削るか」

ブランクーシ「そうして初めて、美女は君だけの作品になるんだ」

アメデオ「貴方が、到達したものがやつとわかりました。でも…」

ブランクーシ「何かあるのか？」

アメデオ「僕にはあなたのような力強い肉体がない…」

フランソワーズ「肋膜炎もあるし、彫刻は無理っぽい」

ピカソ「それでも奴は、石を削った。ボロボロになっていた体調を整えるために一度リヴォルノに帰ってね」

フランソワーズ「お母様は喜ばれたでしょうね」

ピカソ「狂喜乱舞したろうな。彼女はとにかくアメデオを引きとめようとありとあらゆる手段を使った」

フランソワーズ「でも戻ってきたのよね」

ピカソ「それほど当時のパリは魅力的だったんだ。でも奴は、迷路に迷い込んだ」

フランソワーズ「迷路？」

ピカソ「彫刻家を目指したんだ。絵も描いてはいたが、自分を彫刻家だと言いまわり、一晩中、ハンマーを握っていたこともある」

フランソワーズ「確か、あなたもモンパルナスに引っ越したのよね」

ピカソ「モンマルトルは、観光客に荒らされてたからな」

フランソワーズ「でも、仕送りでやっと生きていたアメデオとは、大違いだったのよね」

ピカソ「わしは、才能に見合った報酬を得てただけだ。それを次の作品のために使った」

フランソワーズ「アメデオは認められなかったのね」

ピカソ「モンパルナスで暮らした芸術家で、アメデオを知らない者はいなかった。誰もが一度は奴にスケッチされてたし、ユトリロやスーチンとはいつも飲み歩いてた」

フランソワーズ「時を無駄に過ごしてた」

ピカソ「そんな生活が4年も続いて、奴はまたリヴォルノに帰った」

フランソワーズ「リハビリね」

ピカソ「1913年、夏の終わりに彼はまた、パリに帰ってきた」

○ モンパルナス警察留置所 1913年8月 アメデオ29歳
留置所の床で向き合っているアメデオとユトリロ。

ユトリロ「パリに帰ってきたその日の夜に、カフェから連行されるなんて、いかにもお前らしいな」

アメデオ「親愛なるユトリロ君。これも歓迎の一つだ。モンパルナス警察のデスカヴ署長は、数少ない僕のスポンサーなんだ」

ユトリロ「絵でも買ってくれたのか？」

アメデオ「鋭いな！よく酒が回ってるようだ。油絵十点、しめて千フランでお買い上げ戴いた。しかもこうして、寢床まで用意してくれたんだぞ」

ユトリロ「スーチンも連れてくれば良かった」

アメデオ「無理だな。こここの連中にはまだスーチンの才能は理解できない」

ユトリロ「俺のは理解できるのか？」

アメデオ「お前の絵も売れたぞ！」

ユトリロ「ほんとか？じゃあまた飲めるな！」

アメデオ「朝から迎え酒だ！」

フランソワーズ「絵が認められるようになったのね」

ピカソ「確かに値がつくようになったが、認められたわけじゃない。この頃から、絵画が投資家にとって格好の投資材料になってきていた」

フランソワーズ「安く手に入れて、高く売ること」

ピカソ「そうだ。アメデオの最初の画商は、画材とコニャックを渡して、アメデオを閉じ込め、絵を描かせていた。さすがにすぐ手を切ったようだが」

フランソワーズ「でも絵は売れたんでしょ」

ピカソ「アメデオは、1911年にオープンしたロンドンで、客のデッサンをして、それを売った金で、酒を飲んでた」

フランソワーズ「貴方も随分買ったんでしょ？」

ピカソ「わしは相応の金で買い上げた」

フランソワーズ「このままじゃ、奈落へ転落ね」

ピカソ「すんでのところで、救世主が現れたのさ」

フランソワーズ「女ね」

ピカソ「そうだ。ペアトリス・ヘイスティングス。ジャーナリストだった彼女は、パリにイケメンの天才画家がいると聞いて、はるばるロンドンからやってきた」

○ カフェ・ロトンド パリ 1914年7月12日 アメデオ 30歳

ベアトリスとシャンパンを飲んでいるアメデオ。

ベアトリス「お誕生日おめでとう」

アメデオ「『複雑な性格の持ち主。豚に真珠。1914年にロザリーという安楽ストランで出会う。私は彼の向かい側に坐っていた。ハッシシを吸い、ブランドーを飲んでた。彼には、全く興味が覚えなかったし、一体誰なのかもわからなかった。醜く、残忍で強欲な人間にしか見えなかった』僕のことをこんな風に紹介した女性が三ヶ月後に誕生日を祝ってくれるとは」

ベアトリス「変なところで、切らないですよ！『カフェ・ロトンドでふたたび会う。髯を剃っていて、魅力的だった。可愛らしい仕種で帽子を取ったかと思うと、恥ずかしそうな目つきをして自分の作品を見に来てくれといった』ちゃんと褒めてるじゃない」

アメデオ「稀にみる大戦争が始まっているというのに、僕は、洗練されて美しい女性に誕生日を祝ってもらってる」

ベアトリス「感謝してる？」

アメデオ「この上もないほどに」

アメデオは、立ち上がると自分の椅子をベアトリスの横に並べると、そこに座り、頭を彼女の肩に乗せて目を瞑ってしまう。

アメデオ「ああ、僕は今、本当に幸せだ」

ベアトリス「よしなさい。ここは知り合えばかりでしょ」

アメデオ「誰も僕のことなんか知らないさ」

ベアトリス「さっきも誰かに手を振ってたじゃない」

アメデオ「ああ、ベアトリス、君は僕に恋するべきじゃない。し

たってしょうがない。いや、恋するべきだ。でも、だめだ、意味がない」

ベアトリス「馬鹿なことを言わないで。恋をしているのは貴方でしょ」
アメデオ「ああ、それがすべてだ。だけど、君は僕に反応するかのうに僕を見る、まるで僕が作った最初の彫刻のように」

○ ♪ ああ、この魂の光

フランソワーズ「どうやら彼女は、今までの女性とは違うようね」
ピカソ「ベアトリスの愛は、母親のものだ。奴に懂れるのではなく、明らかに守ろうとしてた」

フランソワーズ「マザコンの坊やには最適」

ピカソ「8月に入って、パリは戦争一色になっていった。もし、この時、ベアトリスがいなければ、奴は本当に終わってただろう」
フランソワーズ「貴方も助けたんでしょ」

ピカソ「奴の立体へのアプローチは、あまりにも直接的だった。絵を諦めて彫刻家を目指したんだ」

フランソワーズ「絵ではあなたのキュビズムを超えられないと思ったんじゃない？」

ピカソ「迷っていたんだらう。わしは奴の作品の価値を奴自身に教えたかったんだ」

○ ヴァイオリン独奏

○ カフェ・ドーム パリ 1914年8月 アメデオ30歳
ピカソ、アメデオ、画商のローザンバールが囲んでいるテーブルに、アンドレ・ルヴェルが寄ってくる。

ルヴェル「邪魔かな？」

ローザンベール「アンドレ！大歓迎だ。パブロは知ってるな。こっ

ちは、モンパルナス一の伊達男アメデオ・モディリアーニだ」

ルヴェル「お噂はかねがね」

ローザンベール「モダン・アートの収集家、わが友アンドレ・ル

ヴェル氏だ」

アメデオ「どうぞよろしく」

ピカソ「これから、お食事かな？」

ルヴェル「いや、済ませたばかりです」

ピカソ「それなら、この伊達男のアトリエに行かないか？」

ルヴェル「それは興味深い」

ピカソ「アメデオは、卓越した話術の持ち主だが、彼の描く絵はそ

れ以上なんだ」

アメデオ「！」

○ アメデオのアトリエ

カリアティードの水彩画を眺める四人。

ルヴェル「確かにこれは、素晴らしい」

ピカソ「アメデオはどうやら、傾きだしている美術界をこのカリア

ティードのように支えて、水平に戻そうとしてるらしい」

アメデオ「君やブラックが、ルソーなんかを担ぎ出して、派手に傾

けてるからね」

ルヴェル「これは譲ってもらえるのかな？」

アメデオ「適正な価格でなら…」

ピカソ「25フランだ。僕ならこの絵に25フラン出す」

ルヴェル「ピカソが言うなら妥当だろう。どうだろう同じ25フラ

ンで僕に譲ってくれますか？」

アメデオ「勿論ですとも、勝手に値付けした輩には渡せませんか

ら」

握手を交わすアメデオとルヴェル。

ローザンベール、ピカソの袖を引っ張り、下手へ連れ出す。

ピカソ「アメデオは自分の絵の価値を知らないんだ。彼の絵は酒場

で5フランで売っていいものじゃない」

フランソワーズ「ご親切ね」

ピカソ「わしは奴に絵を描かせただけだ」

フランソワーズ「彼の絵が好きだったのね」

ピカソ「マチスはわしの生涯のライバルだったが、奴は違う」

フランソワーズ「マチスもアメデオもモデル無しには描かなかった

じゃない」

ピカソ「マチスにとつてのモデルは対象そのものじゃない。自分の

中に眠っている何かを呼び出す触媒のようなものだ」

フランソワーズ「アメデオには違うの？」

ピカソ「奴は、モデルの中に潜んでいる本質を引き出してた。コク

トーの絵を覚えてるのか？」

ジャン・コクトーの肖像

フランソワーズ「勿論よ。本人が激怒したっていう…」

ピカソ「確かに奴が描いた時のジャンとは違ってた。しかし、四十

年後、ジャンはこの絵そっくりになったんだ」

フランソワーズ「モデルを喜ばせるためだけに描いていたわけじゃ

ないのね」

ピカソ「マックス・ジャコブもそう思ってた。だから、奴に画商のポール・ギヨームを紹介して、画家として、独り立ちさせようとしたんだ。お前ならこの絵の価値がわかるだろ」

○ディエゴ・リベラの肖像

フランソワーズ「ディエゴ・リベラね。パリで二人の女性に子どもを生まれ、平然と捨て去ったまさに「親切な人食い」だわ。観念的な彫刻とは違う」

ピカソ「彫刻がすべて酷かったわけじゃない」

○頭部の彫像

ピカソ「ベアトリスが絶対に手放さなかった彫像だ。彼のスタイルをはっきり示してる」

フランソワーズ「でも待って。そんなチャンスくれたマックスを随分嫌ってなかった？」

ピカソ「それは、ベアトリスがマックスを当て馬に使ったからだ」

○ アメデオのアトリエ 1915年11月 アメデオ31歳

乱雑なアトリエの中で、互いに椅子を持って対決しているアメデオとベアトリス。

以下、二人は罵りながら、椅子で殴りあう。

アメデオ「僕はどうせスズメ蜂さ！気に入らないんならさっさとマックスの所へ行け！」

ベアトリス「だったらわめてないで、黙って行かせなさいよ！」
アメデオ「君こそ黙って出て行け！散々当てこすって！」

ベアトリス「飲んだくれの甘えん坊がいきがるんじゃないわよ！」

アメデオ「彼が抱くのは 命かぎりある女中ではなく、失われたバツカスの巫女なのだ！」君が巫女！冗談じゃない」
ベアトリス「こつそり、『危険な関係』を読むような男に言われたくないわ！」

アメデオ「すっかりブルジョワになったピカソや気取ったマックスがお似合いの淑女か！」

ベアトリス「あなたは、貧乏くさい東ヨーロッパ流れのスーチンとつるんでるのがお似合いよ！」

アメデオ「いくら上品ぶっても、君は僕らにたかるハエみたいなものだ」

ベアトリス「自分の価値もわからないマザコンが！」

ベアトリス、思い切り椅子で殴りつける。ついに椅子は崩壊し、

気を失うアメデオ。

ベアトリス「アメデオ！」

アメデオに走り寄り、その身体を抱き上げるベアトリス。

ベアトリス「やめてよ！しっかりして」

アメデオ「(息を吹き返し) 僕の大切なベアトリス。どうやら僕は長く一緒に過ごすぎたようだ」

ベアトリス「！」

フランソワーズ「随分ドラマティックな幕切れね」

ピカソ「わしと君とは違う。アメデオとベアトリスの関係は、この後もだらだら続いた」

フランソワーズ「でも彼女が彼を救ったのは確かだわ」

ピカソ「ぎりぎりのところだな。奴はまた絵を描き始め、ダダイズムの一翼を担うようになる。作品が「キャバレー・ヴォルテー

ル」に載り、展覧会にも出品された」

○ カフェ・ラ・ロトンド モンパルナス 1916年 7月 ア
メデオ32歳

下手で読まれる以下の朗読のように場面展開する
ズボルフスキー「7月のある夕方 街には うつろな目をして
憔悴しきった流浪の民たち

カフェの両側で ぬくもりを求め 新たな情熱を求める
若い男が立ち上がり、道の真ん中で立ち止まる
車にも市電にも目をやらず

男は手にノートを持ち、青い表紙を開く

一枚の紙が、暖かい舗道に… 恍惚にも似た想い
夕刻の祈り人

この紳士を行かせてはならない この7月の夕べ
モディリアーニは僕の人生に送り込まれた」

○ サニーホテル

ルニア・チェホスカの肖像を描いているアメデオ。
その横で、コーヒーを入れているズボルフスキー。

ズボルフスキー「一息入れないか？」

アメデオ「いいね。抜群のタイミングだ」

ルニア「私、まだ緊張しますのよ」

アメデオ「その言葉はそのままお返ししますよ。貴方の美しさを写
し終えるかどうか、僕の心臓こそ今も早鐘のように鳴っていま
す」

ルニア「あら、私のはカフェでじっと見つめられた時からずっとで

すわ」

ズボルフスキー「それを言うなら僕が一番だな。君の絵を見た時か
らだからもう爆発しそうだ」

アメデオ「いや、この貧乏画家の絵を売ろうとしてるんだ。ズボル
フスキー、君の心臓は十分に大きいはずだ」

ズボルフスキー「ギョームがあっさり君との契約を破棄してくれ
たなんて、今だに信じられないよ」

アメデオ「あいつは冷たい男さ」

ルニア「でも貴方の才能を認めてらしたんでしょ」

アメデオ「でも僕は彼の言いなりにはならなかった」

ズボルフスキー「僕の言うことなら聞いてくれるのかな？」

アメデオ「当然だよ。この美しきルニア・チェホスカ夫人さえ通し
てくれればね」

ルニア「あら、それはあなたが私の言うなりってことですか？」
アメデオ「勿論です。マダム」

アメデオ、ルニアの手をとり口づけする。楽しく笑う三人。

フランソワーズ「なんだか希望が見えてきたみたいね」

ピカソ「世の中、それほど甘くはない」

フランソワーズ「売れなかったの？」

ピカソ「そこそこの値はついた。ズボルフスキーはアトリエを用意
し、モデルも手配して毎日小遣いまで渡して、絵を描かせた。

だが、奴は、酒代欲しさにカフェではした金でスケッチを売る
ことをやめなかったんだ」

フランソワーズ「ズボルフスキーの努力が無駄になるじゃない」

ピカソ「それに加えて、妙な女がまとわりついてた」

○ エリック・サティ ジュ・トゥ・ヴー／あなたが欲しい

あなたの苦しみ あたしにもわかるわ 愛しい恋人よ
だから、あなたの懇願にカブトをぬぐわ

どうかあたしを彼女にしてね 思慮分別も向こうへおしやり
悲しみなんかもはやない あたしはとつても懂れる

二人で幸せなあのときを あなたが欲しいの

あたしは少しも悔やまない 望みはたった一つだけ

あなたのそばで すぐそばのそこにて ずっと生きること

どうかあたしの心があなたの心に

あなたの唇が私の唇となりますように

あなたの身体があたしの身体に あたしの肉体のぜんぶが

あなたの肉体となりますように

あなたの苦しみ あたしにもわかるわ・・

そう、あたしはあなたの眼の中に

神聖な約束を読んでいる あなたの恋する心は

あたしの愛撫を求めにくるから

永遠にいだきあい 同じ炎に燃えたとつて

愛の夢の中で交換しましょう

あたしたち二人の魂を あなたの苦しみ あたしにもわかるわ

○ ローズの店 モンパルナス 1917年 2月 アメデオ32
歳

食事をしているアメデオの横に立っているシモーヌ・テイル。
アメデオ「シモーヌ、君が献身的だってことは、僕を含めて、多く
の人が知ってる。時折面倒を見てもらったのも事実だ」

シモーヌ「だったら認めてよ。私の中には貴方の子どもがいるの
よ」

アメデオ「仮に！いいかよく聞け、あくまでも仮にだ！その子が僕
の子であつたとしても、そのことで、僕が君のものになるわけ
じゃない」

シモーヌ「愛しているの」

アメデオ「いいや君は、僕を愛してはいない。僕が欲しいだけだ。

それも多分人としてではなく、哀れなペットを可愛がりたいだ
けなんだ」

シモーヌ「そんなこと……」

アメデオ「ないと言ひ切れるか！知ってるんだぞ。君が僕を賭けの
代償に差し出そうとしたことを！」

シモーヌ「！」

アメデオ「カナダに帰つて、もし本当に生む気があるなら、その子
を大事にしてくれ！僕は断じて認めないが、君が信じるのを止
める権利はない。僕の子だと信じて、大切に育てるんだ！」

フランソワーズ「実際にはどうだったの？」

ピカソ「シモーヌがアメデオ一筋だったわけではなさそうだ。奴は、
確かに女好きだが、彼を追っかけるような女には、冷たかつ

た」

フランソワーズ「その辺は貴方と一緒にじゃない。愛されることを煩
わしいと思うのつて我儉なだけつてわからないの」

ピカソ「愛はそそぐものだ。そして、アメデオが最も愛を注ぐ乙女
が現れる。1917年4月、戦争が続いていたパリの国立美術
工芸学校で、19歳になったばかりのジャンヌは、アメデオと

出逢った」

○ カフェ・ラ・ロトンド 1917年4月 アメデオ32歳
見詰め合つて、ワインを飲んでるジャンヌとアメデオ。

ジャンヌ「あなたは何故、眸を描かないのかしら」

アメデオ「君は何故、教会に通つてる？」

ジャンヌ「普段は紳士のあなたが、突然怒鳴りだすのは何故？」

アメデオ「限りなくおしとやかな君が、時折妖艶さを漂わすのは？」

ジャンヌ「音楽好きのあなたが歌が下手な理由は？」

アメデオ「画家を目指しているのに、君がバイオリンの名手なのは？」

ジャンヌ「貴方のきらめく才能を皆が理解しないのは？」

アメデオ「ジャンヌ、君が認めてくれれば十分だからさ」

ジャンヌ「！」

ジャンヌの唇を奪うアメデオ。

フランソワーズ「おとなしいのね」

ピカソ「彼女は実に控えめだった。いつもワシらの傍にいたのにア

メデオが連れまわす様になるまで、誰も彼女の本当の魅力に気

づかなかったんだ」

フランソワーズ「彼女は、彼を元気付けたの？」

ピカソ「もう一度、絵を描き始め、展示会にも出品した」

○ ユイゲン通りギャラリー 1917年6月 アメデオ32歳
キスリング、ザッキン、モディリアーニの絵が展示されている。
ピカソ「暗く続く戦争の中で、何かが生まれようとしていたんだ」

フランソワーズ「絵は売れたの？」

ピカソ「奴の絵は、中途半端に先進的だったんだ」

フランソワーズ「あなたのキュビズムのようなわかりやすさが欠けてたのね」

ピカソ「絵は売れなかったが、肖像画家としての奴の才能にほれ込んだ客はいた。ロシアの衣装デザイナー、レオン・バクストは、自分の豪華なアパートにアメデオを招いて、肖像画を描かせ、友人に紹介もした。そして、アメデオは絵を描き続けた」

○ アトリエ 1917年9月 アメデオ33歳
イーゼルに向かつているアメデオ。

フランソワーズ「真面目に働いてるようね」

ピカソ「奴は精力的に作品を仕上げた。でも絵はたまるばかりで少しも売れなかった。ズボルフスキーは、それこそパリ中を走り回って、ついにデュフィやヴラマンク、ベルト・ヴェイユ夫人を口説き落とした」

フランソワーズ「デュフィやヴラマンク、ユトリロ、バスキン、確

か貴方の絵も扱ってた画商でしょう？」

ピカソ「そうだ。9区のタイトブー通りにあった彼女の画廊で12

月3日から30日まで奴の個展を開かせたんだ」

フランソワーズ「人は集まったの？」

ピカソ「集まったさ。何しろ、通りに面したウインドウにこんな絵が飾られたんだ」

○ パリ9区タイトブー通り50番地 ベルト・ヴェイユ画廊
1917年12月3日

アメデオ33歳

ウインドウを飾る巨大な裸婦のスケッチに群がる群集。

そこへ警官が、笛を吹きながら現れる。群集を割って、ベルト・ヴェイユ夫人現れる。

ベルト「この騒ぎはなんでしょうか？」

警官「警察庁長官はこのいかがわしい絵画の撤去を命じられました」

ベルト「あなたご自身もこの絵をいかがわしいと？」

警官「この絵には、本来描かれるべきではないものが、描き込まれております」

ベルト「そこに本来あるものを、描き現すのは当然のことではなくて？今、このギャラリーの中には、植民地大臣を初め、多くの芸術家がいらつしやるけど、彼らは皆私と同じ意見だと思いませんが」

警官「あなたはギャラリーの中にもこの類の絵があるとおっしゃっているのですが？」

ベルト「当然ですわ。モディリアーニは、私の知る限り、パリで最も

高の裸婦を描く画家ですもの」

警官「残念ながら、私はその手の作品が展示されていれば、すべて没収するように命じられております」

ベルト「それは没収ではありませんわ。美の略奪です」

警官「私どもは命令に従うだけで」

ベルト「展示されなければ、略奪はなさらないのね」

警官「すぐに閉まっていただければ」

ベルト「お集まりの皆さん。このベルト・ヴェイユが見込んだモディリアーニの作品を今から、趣向を凝らした形でご覧いただ

きましよう。皆さん、どうぞ中へお入りになって、天才画家の作品をご自身の手で壁から外してください。一月開かれる筈だった世紀の個展を一日で終わらせる、そのお手伝いをしていただきます。名作にじかに触れることができるまたとないチャンスですわ」

ギャラリーの中へ押し寄せる群衆。

フランソワーズ「なかなか魅力的なご夫人ですこと」

ピカソ「個展がセンセーショナルだったことが幸いして、アメデオの絵が売れ始めたんだ。シエネマヤーという銀行家は、ろくに見もしないで、4千フランで肖像画を六点も買ったそうだ」

○安楽椅子の裸婦 1917年

フランソワーズ「これと同じような油彩画が当時一枚700フラン、21世紀の円に換算すると多く見ても30万円で売れたのよね。それが、2010年11月2日、ニューヨークのオークションで56億円で落札されてる」

○安楽椅子の上の裸婦

ピカソ「作品の価値は金額でしか評価されないのか？」

フランソワーズ「それは、楽譜のような複製可能な言葉を持たない美術作品の宿命かもしれない」

ピカソ「画家にとって金は、生きている内に支払われただけの価値しかない」

フランソワーズ「アメデオの春は続いたの？」

ピカソ「戦争が続いていたんだ。物価は高騰し、ドイツの爆撃機が、パリを襲っていた。1918年の4月、50万の人々がパリを捨てて、南フランスに逃れた」

フランソワーズ「彼も？」

ピカソ「ジャンヌが妊娠したんだ。ズボルフスキーは、アメデオとの交際にずっと反対していた彼女の母親と一緒に、アメデオをニースに連れ出した」

○ アメデオのアパート ニース 1918年10月 アメデオ 34歳

椅子に坐って編み物をしているおなかの大きなジャンヌ。その横で、食事の支度をしているその母、エビュテルヌ夫人。ワインボトルを持って飲んだくれているアメデオ。夫人が、テーブルの上に、乱暴に皿を置く。

アメデオ「あなたがこうしてワインに溺れている僕を蔑んでいるのはよくわかります」

夫人「それがわかっていているのなら、さっさと別れていただければすっきりしますわ」

アメデオ「よりによって、こんな男と！同じ画家でも、甲斐性のあるウチの息子とは大違い！」

夫人「少なくともアンドレは、酒に溺れてはいないわ」

アメデオ「それは結構！その堅実さこそ！彼が決して大成しない確たる証拠だとしても、彼の家族には喜ばしき事実だ」

夫人「そうよ。自分の他に、別の女にも子どもを生ませるような男とは比べられない」

アメデオ「それは違う！貴方がおっしゃっているのが、シモーヌと

かい、カナダの娘のことなら、それは違う！シモーヌが生むのは彼女の子どもで、我が愛しいジャンヌが身ごもっているのは、まごうことなき僕の子どもだ」

夫人「どちらも父親はあなたでしょ！」

アメデオ「仮に！僕がシモーヌの子どもの物理的な父親だったとしても、断つときですが、これは断じて真実ではないんだが、仮に、あくまでも仮に！そうだとすると、その子どもの誕生を望んでいるのが、シモーヌだけだ！という点を忘れてもらっては困る」

夫人「自分の子どもだとしても、望んでいらつしやらない、というの」

アメデオ「そうだ。そして、このジャンヌの愛しいからだの中で、確実に育っている新たな生命、この子の父親が僕でなかったとしても」

夫人「何を言うの！」

アメデオ「最後まで聞くん！この僕が、この子の物理的な父親でないとしても、この世に僕以上にこの子の誕生を望んでいる男はいない」

夫人「！」

アメデオ「僕は、紛れもなくこの新しい命の父親なんです」

床に倒れるアメデオ。

フランソワーズ「こんな状態で、仕事ができなの？」

ピカソ「奴はいつも酔ってたわけじゃない。パリのように簡単に手に入らないモデルにいらだってはいたが、家とは別のところにアトリエを持って、地道に絵は描いていた」

フランソワーズ「妙にストイックなのね」

ピカソ「奴は絵を信じてた。11月11日、休戦条約が結ばれ、長い戦争が終わった」

フランソワーズ「赤ちゃんも生まれたのよね」

ピカソ「女の子だ。母親と同じ名前がつけられたんだが、奴はイタリア語でジョバンナと呼んだ」

フランソワーズ「子煩悩だったって聞いているわ」

ピカソ「喜びのあまり、出生届けを出し忘れたくらいだ。奴は、自分とエビュテルヌ夫人の争いに疲れ果てていたジャンヌが赤ん坊を育てられるか、心配になり、乳母を捜した」

フランソワーズ「結婚は？」

ピカソ「自分がユダヤ人だという意識が、ジャンヌの実家が望むカトリックの結婚式を拒んでいて実現しなかったが、ジャンヌが自分の妻であることは認めてた」

フランソワーズ「パリには戻らなかったの？」

ピカソ「戻らなかった。翌年の4月、乳母を見つけて郊外に引っ越して、絵を描いていた」

フランソワーズ「落ち着いたのね」

ピカソ「そして、どうやら。奴の絵が、他の誰のものとも異なっていることを意識するようになったんだ」

フランソワーズ「スタイルを発見したの？」

ピカソ「それに気づかせてくれたのは、ルノアールだ」

フランソワーズ「印象派の？」

ピカソ「セザンヌの個展でアメデオと意気投合したオステルリンドが、奴を隣に豪邸を構えていた巨匠に引き合わせたのさ」

○ ルノワール邸 レ・コレット カーニュ・シュル・メール

1919年5月 アメデオ34歳

東屋で対しているアメデオ、そして車いすのルノワール。

ルノワール「ズボルフスキーに君の絵を見せてもらったことがある」

アメデオ「恐縮です」

ルノワール「君は楽しみながら描いているかい？」

アメデオ「楽しみながら？」

ルノワール「そうだ。私は、モデルたちの美しさをゆっくりと愛でながら、筆を走らせる」

アメデオ「それが、あの優美でふくよかなラインを！」

ルノワール「そうかもしれない」

アメデオ「僕の絵は……」

ルノワール「君も私も女性の美しさに魅入られている。その点は、同じだろう」

アメデオ「違うのは？」

ルノワール「フォルム」

アメデオ「！」

ルノワール「私は彼女たちのフォルムの美しさを描く。でも君は、その奥に潜んでいる別の美しさを見ているんじゃないか？」

アメデオ「！」

ルノワール「私には、君が眸を描かないのは、その神秘さを保つためのように思えるんだ」

二人を夕陽が覆っていく。

ピカソ（OFF）「同じ月の31日、奴は、妻と赤ん坊を残したま

ま一人でパリに戻った」

○ クロズリー・デ・リラ La Closerie des Lilas モンパルナス

1919年6月

アメデオ34歳

ルニア・チェホスカ(25)とワインを飲んでいるアメデオ。

アメデオ「ジャズにカクテル、カフェがバーやティーラウンジに、パリはすっかり変わってしまった」

ルニア「私も歳をとったわ」

アメデオ「君の美しさはちっとも変わらない。むしろ、輝きを増したくらいだ」

ルニア「アメデオ、あなたは どうして、いつもそんな目でじっと見つめるの?」

アメデオ「南フランスには、それに値する人がいなかった」

ルニア「夫が三年も音信不通の私にはとても危険な台詞だわ」

アメデオ「君の方こそアパートの隣で一人暮らしをしている男には…」

ルニア、アメデオの唇に人差し指をあて、軽くキスする。

○ ジョゼフ・バラ通り3番地 1919年8月 アメデオ35歳

舗道に並んで腰掛け、ワインのボトルを交互に飲んでいるアメデオとユトリロ。

ユトリロ「おいアメデオ、暗い、牢獄のような療養所からやつこの思いで抜け出したこのユトリロ様が、金が払えなくて、ロザリーの店からたたき出されたのはいいとして…」

アメデオ「ちょっと待て!俺たちは、二人で、あの店の壁いっぱい

にピカソがサインもせずに、飲み代代わりに描くスケッチの100倍の大きさの絵を描いたんだ。断じて金を払わなかったわけじゃない」

ユトリロ「それなら、釣りでももらって、流行のバーへでも繰り出そうじゃないか!なんだって、舗道に坐ってなきゃいけない」

アメデオ「ここには、俺のたった一つの希望があるんだ」

ユトリロ「この薄汚い、路地に、希望が!」

アメデオ「あの窓だ!」

ユトリロ「あの灯も消えた真つ黒な窓に我らが希望が…」

アメデオ「俺の希望だ!ジョバンナが、ルニアの横で希望に満ちた未来を夢見て、眠ってる」

ユトリロ「ルニア?お前の女房は、確か、ジャン、ジャンヌじゃなかったか」

アメデオ「我が愛しいジャンヌは、確かに我が妻だ。しかし!我が特段のモデルであり、伴侶ではあるが、母としては…」

ユトリロ「待て、ちょっと待て!そうだスーチン、スーチンが言ってたぞ。ジャンヌのお腹には」

アメデオ「俺の二つ目の希望が宿ってる。そのために誕生日の5日前に、こんなものを書いたんだ」

アメデオ、胸のポケットから、紙片を取り出し、ユトリロに渡す。
ユトリロ「なんだこれは…、私は、本日、1919年7月7日、書類が届き次第、ジェーン・エビュテルヌ、ジェーンって誰だ?」

アメデオ「ジャンヌだ。英語みたいに読むな」

ユトリロ「これは失敬!ジャンヌ・エビュテルヌと…、結婚することを誓います!アメデオ・モディリアーニ。なんだこれ、宣誓書か?」

アメデオ「そうだ。証人の署名もある」

ユトリロ「ズボルフスキーに、ジャンヌ、ルドウンスカ、うん、誰

だこれ」

アメデオ「ルニアだ」

ユトリロ「それで、書類とやらは、着いたのか？」

アメデオ、咳き込み始める。

ユトリロ「どうした友よ！死ぬのはまだ早いぞ」

咳き込むアメデオ。

フランソワーズ「大丈夫なの？」

ピカソ「ボヘミアンというレッテルは内気な自分の隠れ蓑だった。

奴の体を本当に気遣っていたのは、ルニアだったようだ」

フランソワーズ「ジャンヌではなく？」

ピカソ「ジャンヌは、奴にすがってた。毎晩、酔っ払ったアメデオ

を警察に引き取りに行き、カフェで別の女をスケッチする奴を、

舗道に坐っていつまでも待っていた」

○ ロントト前の階段 1919年11月

下手の階段で、震えながら、坐っているジャンヌ。

上手のカフェで、トーラ・クリンコフストロム (30) のスケッ

チを終え、二人で出てくる。

アメデオ「トーラ、この若き乙女こそ、わが最愛の妻、ジャンヌ

だ」

トーラ「奥様？」

アメデオ「ジャンヌ、このトーラは、遠くスエーデンから、画家を

目指して、このパリにやってきた（咳き込む）」

ジャンヌ「（アメデオに駆け寄り）帰りましょ」

アメデオ「ジャンヌ、トーラ、君は素晴らしいモデルだ。でも僕が

天国で描きつづけるのは（咳き込む）きっと後からやってきて

くれる（咳き込む）ジャンヌだ」

二人、下手へ。

○ ♪ああ幾たびか

ピカソ「ルニアは奴を南フランスで静養させようとした。ジャンヌ

と赤ん坊も一緒に」

フランソワーズ「ジャンヌが反対したのね」

ピカソ「母親とアメデオが醜く争った記憶しかない場所だからね」

フランソワーズ「あきらめたの？」

ピカソ「多分、弱っていくアメデオを見るのが辛かったんだろう。

ルニアは、この冬一人でニースに旅立った」

フランソワーズ「この頃、アメデオの作品は海外で評価が高まっ

たって聞いているけど」

ピカソ「ロンドンやスイスでファンがつき始めてた。11月1日

から12月12日まで、ズボルフスキーは奴の作品をサロン・

ドートンヌに出品したんだ」

○ グランパレ パリ 1919年12月 アメデオ35歳

展示されている 百姓娘、男の肖像。裸婦、若い娘の肖像。

並んで絵を見ているポール・ギヨームとズボルフスキー。

ポール「どうやら、ようやくモディリアーニも正当な評価を受けら

れそうですね？」

ズボルフスキー「パリーの画商、ギヨームさんに保証していただけ

れば、ありがたいのですが…」

ポール「スイスやイギリスでの評判が、何故、パリで爆発しないのか？そう思っていないませんか？ズボルフスキーさん」

ズボルフスキー「どうしてなんです？」

ポール「あなたは、この世界では純粹すぎる。私を含め、パリの多くの画商が、このろくでなしの作品をずっと前から高く評価しています」

ズボルフスキー「！」

ポール「彼らが今一番注目していることをご存知か？」

ズボルフスキー「新作の進み具合？」

ポール「病状ですよ。大分悪い咳をしているらしい」

ズボルフスキー「確かに今、流感で…」

ポール「この冬の寒さは、特に厳しい。精々気をつけることです」

ズボルフスキー「ポールさん！」

ポール「まあ、寒さの厳しい冬の年には、快適な春が来るともいいますからな」

フランソワーズ「嫌な世界ね」

ピカソ「オリジナルしか存在しない絵画は、完全に投機の対象になっちゃったんだ。投機の醍醐味を知ってるか？」

フランソワーズ「安く買って、高く売る」

ピカソ「時間だ。宝くじとカジノの違いだ。掛けてから、報酬を受けるまでの時間が短かいほど人は興奮する」

フランソワーズ「パリの画商たちが待っていたのは…」

ピカソ「それは、ポール・ギョームが予言したとおり、すぐにやってきた」

○ パリ慈善病院 1920年1月24日 アメデオ35歳

ベッドで横たわっているアメデオ。その顔をじっと見つめているジャンヌ。

その横で見守っているズボルフスキー。

アメデオ「(オフ) 母さん、写真を送ります。赤ん坊の写真が無くてすみません。彼女は乳母と一緒に田舎にいます。春にはイタリアに行くことを考えています。イタリアにしばらく居ようと思います。はつきりとは決めていません」

照明が変わる。

悲鳴を上げるジャンヌ。

暗転。明転すると一人舞台奥の高所に佇んでいるジャンヌ。手を広げて、飛び降りる。

○ 二日後、1月26日午前四時 ジャンヌは、自ら命を絶った：

○ ピアノの独奏をバックに、アメデオが愛でた女たちの肖像画が次々に現れ、舞台上にも多くのイーゼルに様々な美女が、微笑む。

○ AMEDEOとはイタリア語で「神の愛」を意味する。

FIN

2014年8月17日 初校

参考文献

○ ジューン・ローズ著 宮下規久朗・橋本啓子訳 モディリアーニ

- 夢を守り続けたボヘミアン 2007年 西村書店
- 橋本治・宮下規久朗著 モディリアーニの恋人 2008年 新潮社
- ローランド・ペンローズ著 高階秀爾・八重樫春樹訳 ピカソ
その生涯と作品 1978年 新潮社
- Francoise Gilot Life with Picasso 1990 Virago Press
- フランシス・アレグザンダー著 山梨俊夫・小野寺玲子訳 美の
20世紀③ モディリアーニ 2006年 二玄社
- フランソワーズ・ジロー著 野中邦子訳 マティスとピカソ 芸
術家の友情 1993年 河出書房新社
- フィリップ・コリー監督 字幕岡崎はな 字幕監修解説の野仲
邦子 マティスとピカソ 二人の芸術家の対話 ナウオンメディア
ア